説教20221002ハバクク書２：１－４ルカ１７：１－１０「しなければならないこと」

国破れて山河アリと、昔の中国の詩人は歌いましたが、それは、国家が破綻しても、山や川からの恵みによって人間の生活は続けられる、という意味でしょう。そしてハバクク書にはその続きが記されています。ハバクク書３章17節から

いちじくの木に花は咲かず／ぶどうの枝は実をつけず／オリーブは収穫の期待を裏切り／田畑は食物を生ぜず／羊はおりから断たれ／牛舎には牛がいなくなる。

しかし、わたしは主によって喜び／わが救いの神のゆえに踊る。

国も、山河の恵みも、それどころかこの地がなくなっても、私は主によって救われ、主によって喜び躍っているのです。これこそ救い主イエスキリストによる救いのご計画であり、私たちの信仰であります。ですから私たちはこの世の国に執着する必要がありません。日本人は７０年余り前に、日本が滅んでしまうという恐れの前に辛酸をなめましたが、それは日本という国に執着する人々の心が招いた結果だと言えるでしょう。

では、私は、この地上での国が滅んだ時、一人で孤独に喜びながらそこを逃げ去るのでしょうか。そうではありませんね。そもそも私たちは、この地上で死ぬ時は、必ず、この地上の国を後にすることになるのですから、誰しも、いつかは必ず、この地上の国を後にすることになるのです。この様に黙想していきますと、なんだか、この世の国に執着していることのほうが、本当に意味がない、それこそ孤独を招くことだと思われてくるでしょう。

このことは、それぞれの国々の実際の様子を見てみればよく分かります。イギリスのエリザベス女王の御葬儀は、ウェストミンスター寺院という教会で行われました。イギリスの国民たちは女王を天の国へと見送りました。そこには別れの悲しみの中にも、永遠に存続する次の国での命を喜び、期待する雰囲気が満ち溢れていました。女王はイエスキリストの僕として召され、天の国では貴賤や上下関係は無いのです。イギリスはキリスト教国でありますので、これくらいのことは常識としてみんな知っているのです。ですから、そこに、この地上のイギリスという国にあくまで執着するという意識は生まれないのだと思います。

そして日本ではどうでしょうか。日本では安倍元首相の御葬儀が行われました。葬儀では、彼の業績と人柄などが褒めたたえられました。彼は特別な人物として顕彰されました。彼は亡くなっても、日本というこの地上の国の名誉国民です。葬儀場の外では、彼が国葬されることに反対する人々がデモをしています。誰もが、日本というこの地上の国に執着しようとしています。。しかし、たとえ死んでも、私たちはこの日本という国に執着しないといけないものなのでしょうか。

さて、ここは、国家や政治を論ずる場ではありませんので止めますが、とにかくこの地上においてそれぞれの国々がもつ雰囲気や常識というものには、これほどまでに違いがあるということを一言申し上げておきます。

ハバクク書に記されました国の滅びも、6世紀にカルデア人に攻め込まれ滅ぼされようとしているイスラエルの国の具体的な体験に基づいています。絶体絶命の国民に対して主なる神は言います。ハバクク書2章２節から

主はわたしに答えて、言われた。「幻を書き記せ。走りながらでも読めるように／板の上にはっきりと記せ。定められた時のために／もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

幻を書き記せ、という言葉は、エレミヤ31章 の「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」という御言葉を思い起こさせます。律法はいつも持ち運べるように携帯用に記され、終わりの日まで保持されるということです。私たちはそれがなくなったとか、見失ったと言って騒ぐ必要等なく、心穏やかにそれが完成する日を待ち望んでいることが出来るのです。それが私たちに与えられている幻であります。

「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」これは、パウロやルターも重んじた、大変重要な御言葉でありまして、いわゆる信仰義認の根拠とされた御言葉であります。高慢な者は律法に自ずから違反しています。彼は、どうやっても正しくはありえないのです。しかし、神に従う人は信仰によって生きるのです。ここで言われている信仰という言葉はヘブライ語でエメツと言います。まこととか真理などという意味で、アーメンという言葉の素になった言葉であります。ですから神に従う人を具体的に描写すれば、いつもアーメン、アーメンと言いながら、主なる神のまことを追い求めて生活している人、ということになるでしょう。まとめて言い換えますと、高慢な者というのは、律法を顧みようともしないで正しくない生活をする者であり、神に従う人というのは、いつも律法を愛しそれを確かめながら、正しくあろうとして生活をする人ということになるでしょう。そして、神に従う人は、たとえこの世の国が滅んでも、主によって喜び躍って生活し続けることが出来るのです。

この様に、いつもアーメン、アーメンと口ずさみ主の律法を愛しそれを確かめながら生活を続けるクリスチャンたちは、確実に天の国に召されるのですが、そこには高慢ではなく従順があります。

この従順は、謙遜やへりくだりという言葉でも言い表されますが、日本という国にあっては、この主が言われるところの従順の真意を伝えることがなかなか難しいのであります。

簡単に説明すれば、聖書が説く従順というのは、御子イエスが父なる神に対して、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順だった、という御言葉に代表されるように、あくまで、私たちが、主イエスに従順であり続けるということです。このことを基礎として、人への従順も派生してくるのですが、その根底にあるのはあくまで、私たち一人ひとりが、主イエスに従順であり続けるということであります。このことを逸脱する時、人への従順は、卑屈という言葉で言い表される性格を帯びてくることでしょう。

今日のルカ福音書の箇所では、私たちが主イエスに従順であることが、小さい者、取るに足りない者という形容で特徴的に語られています。私たちが小さい者であり取るに足りない僕であるということは、実は、私たちを高慢であることから逃れされ、あくまで従順な者とするためのメリットであるのですが、このことはある意味、高慢さやプライドが推奨されているこの世の中にあっては、なかなか受け入れがたいことだと思います。私たちのこの世での一般的な発想は、次の様にゆがんだものであります。小さい者の一人をつまずかせても、小さいことなので気にしない。自分に対して罪を犯したものは、決していつまでも許さないで覚えておく。「わたしどもの信仰を増してください。そして大いなる思い込みによってなんでもできるようにしてください。」ご主人様、どうか僕に感謝してください。

ちょっと大げさに表現してみましたが、ここまででなくても、誰しも、このような高慢のほうへの傾きがあることを否定することが出来る人はこの世にあって誰一人いらっしゃらないことでありましょう。

小さい者、取るに足りない僕であることは、本当に私たちにとって幸いであります。カトリック教会や聖公会で古くから祈られ続けている罪の告白と懺悔の祈りがあります。「憐み深い父なる神よ、私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、思いと言葉と行いによって多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお許しください。新しい命に歩み御心に従い御栄を顕すことが出来ますように。イエスキリストによって、アーメン」という祈りですが、「私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、」というくだりでは長年にわたって唱えられ続けている意味合いの深さを知らされます。私たちは、いつまでたっても毎週、してはならないことをし、しなければならないことをしないままに過ごしている罪人であります。ここまで厳密に事細かに祈られますと、誰しも自分が背負っている罪から目を背けることは出来ないでしょう。

しかし、今日のルカ福音書の箇所の最後には、たとえ話によってイエス様の福音が語られています。

『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』

この様にいつも「しなければならないことをしただけです」と言って生活することが出来るということは、なんという幸いでしょうか。それこそ、罪を犯すことがない、主の御心に従う生活であると言えるでしょう。。この様に説く私自身も、「しなければならないことをしただけです」という生活ではなく、「してはならないことをし、しなければならないことをせず、」と毎週、主の前に懺悔する生活を送っている訳ですが、誰にとっても「しなければならないことをしただけです」と言い続けることが出来る生活というのは、この世では実現することがない幻であり続けることでしょう。

今日のルカ福音書の箇所には、小さなものと対比して、大きな事、偉大な出来事の事どもが書き記されています。曰く、、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。／「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」／この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

これらの事どもはそれぞれ、この世で見過ごしにされない重大な出来事であります。なかなか起こることではないし、万一起こったら、スキャンダルになったり、みんなの眼を集めて驚かせたりすることでしょう。そこには神の眼からみて、いいこともあれば、又、悪いこともありますが、一つ共通して言えることは、これらの大きな出来事は、どれも一人の小さな者に関わりがあるということです。。小さい者をつまづかせること、小さな兄弟が戒められ悔い改めるということ、私たちクリスチャンがからしだね一粒ほどの小さな信仰を保って生きているということです。

神に従う人は信仰によって生きる、ということは、私たちが小さい者として、からしだね一粒ほどの小さな信仰を保って主イエスに従って生活していくということです。そうしていくうちに、いつしか、私たちは、主によって大いに喜び　わが救いの神のゆえに踊る者とされるということです。私たちは自ら高慢になって大きなことを成し遂げようとし出したら元も子もないのです。そのことを今日の御言葉によく聞きながら、私たちは定められた時の、もうひとつの幻を待ち望んで参りましょう。